

いつも通りの挨拶

新約聖書はぜんぶで 27 の文書からなっています。4 つの福音書と使徒言行録、それからヨハネの黙示録の 6 つをのぞくと残りの 21 の文書が手紙です。これらの手紙は受取人である人たちの名前をあげてローマの信徒への手紙とか、ヘブライ人への手紙と呼ばれることもあれば、差出人の名前からってヤコブの手紙、ペテロの手紙、ヨハネの手紙、ユダの手紙と呼ばれているものもあります。内容は教会に集っている信徒たちの信仰的な問題を取り上げてそれに応えたり、教会内部に生じたさまざまな混乱に対処したりしたものです。これらを読みますと新しくキリストを信じて生きる者とされた立場から彼らがもともと属していた社会では当たり前であった習俗や習慣とどう折り合いをつけたら良いか具体的な指示を与えたもの、そして、その根拠となるキリスト・イエスが何を彼らに与えられたか、神がキリストを通して、どれほど恵み深く彼らに素晴らしい贈り物をなされたか、それらを繰り返し確認することで文化的な摩擦や、周囲の無理解や、信仰をもったことで生ずる様々な困難に耐えて時代・社会を生き抜くように励ましています。今日から暫くの間、半田教会の朝礼拝では、この 21 あります手紙の中から、ペテロの手紙をとりあげてその示すところに聴きたいと願っています。これまでわたしはきちんと最初から最後まで読むかたちではローマの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙、フィリピの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙と使徒パウロの書いた手紙を読んできました。パウロの手によるものではない手紙を取り上げるのはヨハネの手紙に続いて 2 回目なのですが、このペテロの手紙からも幾度か説教はしたことがあります。キリスト者とは何かを教える大切な聖句として修

養会などで紹介したこともありました。今回は通して読んでゆくことで、コロナとウクライナとふたつの「死の陰の谷」を歩んでいるわたしたちへと指し示される道を見出したいと願っています。

さて、まずこの手紙を書いたペテロですが、ざっくり分けてしまうと使徒パウロが異邦人の伝道者、つまりユダヤ教の伝統をもっていない異教世界にキリストの教えを宣べ伝えたとする、ペテロはユダヤ人のキリスト者、ユダヤ教のルーツを保持しながら、ナザレのイエスがメシアであることを信じた人々、ユダヤ教側からはナザレ派と呼ばれた人々を対象に伝道の責任を負った人物です。この手紙が書かれたのは1世紀の末頃、イエス様が十字架にかかって復活したのち、大体50年近くが経っていると思われる時期です。すでにこの頃にはユダヤを支配していたローマ帝国はユダヤ教ナザレ派と考えていた宗教集団がまったく別の教義を報じる団体であることに気づいていたとされます。それはひとつには母体となったユダヤ教側が、イエスをメシアと信じるキリスト教徒たちを異端視して、アナテマと呼ばれる呪いをもって彼らのコミュニティから追放し始めたためです。「ナザレ人、イエスを主と告白する者は呪われよ」というものです。またローマへの反逆の結果、西暦70年に内乱状態となったエルサレムは神殿が破壊され、ユダヤ人は全体として地中海世界全体に散らされてゆく時代に入ります。これが離散したユダヤ人＝ディアスポラのユダヤ人と呼ばれる存在で、そうしたなかで現在のトルコのアジア側、ポントス・ガリラヤ・カパドキア・アジア・ピディニアの各地に離散して仮住まいをしているユダヤ人キリスト者たちと異邦人からの改宗者に、この手紙が書かれました。パウロの手紙は、テサロニケ、コリント、フィリピなど、ある特定の教会を名指しで書かれています。

半田の信徒への手紙みたいな感じですが。しかし、この手紙は地域に散らされている諸教会・伝道所宛ですね。非常に広範囲にある人々に向けられています。尾張・三河・美濃・飛騨・遠州の各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ、といった感じで手紙が書かれています。こうした特徴から、教会への一般的、かつ普遍的内容の手紙ということで、この手紙は共同書簡と呼ばれるもののひとつです。このことは逆に言いますと、キリストを信じる者たちが広範囲に生れつつあったこと、その中心となる教会を束ねる教えや制度というものが次第に形作られつつあったことを示しています。そのことは、この手紙の冒頭の挨拶の部分にも見て取れます。

「イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス・ガリラヤ・カパドキア・アジア・ピディニアの各地に離散して仮住まいしている選ばれた人たちへ」と5つの地方に分散している教会のグループにあてられています。そのあたりが教会名をあげて手紙の名前とするのではなく、著者の方をあげて手紙の名前としている手紙の特徴ですね。そしてさらにこれらの教会の状況が「離散して仮住まいしている人々」となっています。これは原文では、ディアスポラのパレピデーモスな人々となっていて、ここにわたしたちが心に刻まなければならないキリスト者の自己理解があります。さきほどディアスポラについてはユダヤ戦争やユダヤのコミュニティから呪いをもって追放されたことによる結果として「離散」した。今日のわたしたちの理解にしたがえば「難民」となったわけです。戦争や、災害によって故郷を追われ、難民キャンプや、仮設住宅を生活の場とする状態は今日でも珍しくありません。そうしたディアスポラ（離散して）のパレピデーモス（仮住まい）の状態は、しかし、わたしたちキリスト者にとって、本質的な状態であることをこの手紙は語

っています。それはわたしたちの信仰の父であるアブラハムに神が言われた「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしの示す地へ行きなさい」という、行く先も知らずに、土地のつながりと血のつながりから離脱したあの旅立ちにルーツをもっているからです。アブラハムは行く先々で祭壇を築いて神を拝み、天幕生活を続け、約束の地を目指しました。ここから天を望み、天を国籍とする歩みが始まっています。パレピデーモスは「仮住まいの者」と訳されていますが、パラとデーモスで「かたわらに置かれた・民」という言葉こそが、この地上を仮の宿りとして、天に国籍を持つ者として生かされているわたしたちキリスト者の基本的な性格を表していますし、わたしたちの生き方が常に旅の途上であることを示しています。そのことは、この離散して仮住まいをしている者たちが「選ばれた人たち」であり、2節以下にあるように、それは「父である神があらかじめ立てられたご計画に基づくもの」とされていることは重要です。神の先見のまなざしが、わたしたちに注がれ、そのご計画に従って「霊によって聖なる者とされている」、神様から特別に選び分かたれていることが「聖なる」ということの意味であり、それはイエス・キリストに従い、その血を注ぎかけて頂くために選ばれたのだと言うのです。この部分はちょっと旧約聖書の知識が必要な箇所です。出エジプト記のなかに、エジプトから脱出したイスラエルの民がシナイ山のふもとで十戒をいただき、律法の朗読のあとで、神の民として生きる誓いをたてる重要な箇所があります。シナイ契約と呼ばれる旧約聖書の中心の一つですが、こう記されています。

Ex24 章 3—8 節 「モーセは戻って、主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせると、民は皆、声を一つにして答え、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と言っ

た。モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半分を祭壇に振りかけると、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

血は命そのものです。かつて旧約の時代、神の民となることを約束した彼らに犠牲の血が振りかけられました。その約束を彼らは守りとおすことが出来なかったのですが、神はその独り子をお遣わしになることによって、わたしたちの背きの罪を拭い、新しく神の子として生きる道を開いてくださった。十字架の上で流されたイエス・キリストの血の贖いによって、わたしたちの罪の問題は解決され、死も、主の復活によって眠りへと変えられている。この新しい消息によって生きるものとされたのが、神のご計画によって選ばれて、聖なる者とされているあなたがた、そのあなたがたは、父と子と聖霊の働きによって、キリスト・イエスへと招き入れられ、その血によって贖われた尊い宝であることが示されます。そして、その生き様は、離散して仮住まいをしていると言われるように、この地上を故郷とするのではなく、天を故郷として生きる、聖書本来の信仰の伝統にたったものであることが、まず告知されているのです。これが聖書の語るキリスト者の「いつもどおり」なのです。こうした自己理解は、現代に生きるわたしたちにとって挑戦的なものかもしれません。しかし、時代がふたたび揺れ始めたいま、

わたしたちが守るべきものは何か、永遠のものは何か、御言葉が語りかけるわたしたちの歩みは何によるものであるのかを、この手紙を通してあらたに確認をしていきたく願っています。

お祈りいたします。